

論 文

地域における子育て支援活動「子どもミュージアム」
に参加した学生の意識の変化について
—学生アンケートの内容分析を通じた“実践的学び”の検証—

西村麻希・西村侑香里・田中麻里

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成28年12月12日受理)

**Changes in the Attitudes of Students Who Participated in *Children's Museum*,
a Community Activity to Support Childrearing
—Verifying “Practical Learning” Through Content Analysis of Student Questionnaires—**

Maki NISHIMURA, Yukari NISHIMURA, Mari TANAKA

(Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University)

(Accepted December 12, 2016)

論 文

地域における子育て支援活動「子どもミュージアム」
に参加した学生の意識の変化について
—学生アンケートの内容分析を通じた“実践的学び”の検証—

西村麻希・西村侑香里・田中麻里

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成28年12月12日受理)

**Changes in the Attitudes of Students Who Participated in *Children's Museum*,
a Community Activity to Support Childrearing
—Verifying “Practical Learning” Through Content Analysis of Student Questionnaires—**

Maki NISHIMURA, Yukari NISHIMURA, Mari TANAKA

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University*)

(Accepted December 12, 2016)

Abstract

Children's Museum, an activity to support childrearing conducted at Nishikyushu University, is an ongoing activity that aims to support childrearing and child development in the community. In the 2015 academic year, 14 actions were conducted with the participation of a total of 138 households (379 persons), and in recent years the number of new applicants and repeaters has also been increasing.

This paper examines how students participating in these activities have acquired learning through practice and the changes in their attitudes before and after practical learning.

The results clarified that majority of the students had felt the practical activity would be “difficult”, “tough”, and felt tension and anxiety prior to engaging in the practical activities. However, after completing the activities impressions were largely positive, such as a sense of satisfaction or achievement, suggesting that the experience gained through practice had been meaningful for the students.

Key Words : Community 地域

Childcare support activities 子育て支援活動

Practical learning 実践的学び

Changes in student attitude 学生意識の変化

1. はじめに

平成21年度からスタートした子育て支援事業「子どもミュージアム」は、平成28年度で8年目を迎え、活動開始当初より“地域に開かれた大学づくり”そして“地域の中での子育て・子育て支援”を目指し、今日まで開催を続けてきている。

開設から8年目を迎えた現在、新規参加者やリピーターの増加、さらには保護者同士の口コミによる参加の広がりなど、近年の参加申込の特徴からも、本学による取り組みが徐々に周知されはじめ、且つ地域に少しずつ根付いてきていることが窺える¹⁾。

活動内容に関しては、“体遊び・おはなし・科学・音楽”などを取り入れたプログラムが、年間を通して企画され、様々な年齢層の子どもたちが楽しめるものとなっており、その内容も年々多岐にわたっている。

また、ここ1～2年の取り組みの特徴としては、校内での開催のみに留まらず“出張講座”として、大学近隣の小学校に出向き、その地区の青少年育成事業団体（放課後子ども教室）と連携・協同し、アウトリーチ型の開催をおこなうなど、その活動範囲も徐々に広がりを見せはじめ、より多くの方々に参加していただける場となってきている。

さらに、平成28年度には、新たな試みとして本学のサテライト教室²⁾がある「小城市まちなか市民交流プラザゆめぷらっと小城」での開催をおこなうなど、開始当初と比較すると、地域の中により開かれた子育て支援活動へと変遷を辿ってきている。

本活動の企画・運営は、「子ども学演習」の受講生(子ども学科3年生)が主におこなっており、保・幼・小領域における専門職業人を目指す学生にとって、“子どもや保護者との関わり方”や“子育て・子育て支援のあり方”について、実践を通して体得することのできる貴重な場として繋がっている。

前稿²⁾では、先述したような“実践的学び”の検証を試み、本活動に参画した学生たちが、どのよう

な学びや気づきを得ていたのか、その具体的な内容について整理をおこなったが“どのような経過を経て学生が学びを獲得したのか”さらには“取り組みに対する学生の意識(気持ち)変化”等については、十分な検討がなされていない。

そこで、本稿の前半では“平成27年度の活動内容及び活動実績”について報告し、実践活動の意義や今後活動を続けていく上での課題について触れる。さらに後半では、本活動での取り組みを通した“学生の学び”や“実践に対する意識の変化”について「準備・企画段階(実践前) - 活動当日(実践中) - 活動を終えて(実践後)」といった一連のプロセスを軸に検証をおこない、本活動での実践を通した学びのあり方や、取り組みに対する学生の意識の変化について考察していきたい。

2. 活動の概要

1) 開催日時及びスケジュール

本活動では、就学前の子どもとその保護者、そして小学生を主な参加対象としていることから、「①平日開催(木曜日)」と「②土曜開催」の2パターンを活動日として設けている。

なお、平日開催時には、子どもミュージアムの活動プログラム終了後から14時までの間、「子育て支援室」と「保育演習室」の2室を自由開放しており、室内に配置している遊具で遊んだり、昼食をとりながら保護者同士が交流したりするなど、子どもと保護者の憩いの場として利用されている。

また、本活動のスケジュールは、Table. 1の通りである。

2) 活動場所

主な活動拠点は、西九州大学(佐賀キャンパス)であり、「表現スタジオ」「子育て支援室」「保育演習室」の3室を使用し、活動を開催している(Figure. 1～3)。

また、近年は“出張講座”として、大学近隣地区

Table. 1 活動スケジュール

木曜日開催	土曜日開催	活動スケジュール	学生の動き
10:15～	9:30～	受付開始	環境設定 受付・駐車場誘導
11:00～12:00	10:30～11:45	ミュージアム開催	活動プログラムの実施
12:00～14:00	—	施設開放(木曜日のみ)	片づけ・掃除



Figure. 1 表現スタジオ

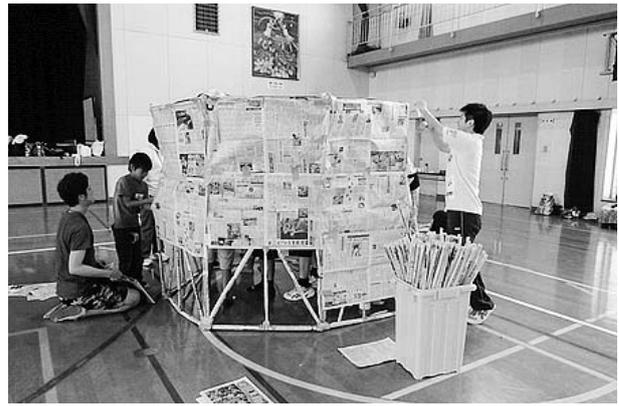


Figure. 4 出張講座「紙で家をつくろう」



Figure. 2 子育て支援室



Figure. 5 「夏休み最後に OGI (を・で) 学ぼう」



Figure. 3 保育演習室

の青少年育成事業団体(放課後子ども教室)と連携・協同し、その地区の小学校に通う子どもたちを対象に、小学校体育館を利用して活動をおこなうなど、学内での開催に留まらず、地域に出向いた取り組みを実施している (Figure. 4)。

さらに、平成28年度には、新たな試みとして本学のサテライト教室がある「小城市まちなか市民交流プラザゆめぶらっと小城」での開催を年2回おこない、地域により開かれた子育て支援活動となりつつある (Figure. 5)。

3. 活動実績 (平成27年度)

1) 参加申込の状況

平成27年度は、通算59世帯の申込みがあり、うち43世帯が新規参加、16世帯が、既に以前参加したことのある方からの申込みであった。前年度と比較すると、新規参加者が増加しており〔平成26年度実績：新規参加32世帯〕、全体の7割以上が新規参加者となっていた (Table. 2)。

Table. 2 参加申込の状況

	平成26年度	平成27年度
参加世帯数	48	59
(内訳) 継続	16 (33.3%)	16 (27.1%)
新規	32 (66.7%)	43 (72.9%)

実数は世帯数を標記

2) プログラム内容と参加実績

平成27年度は、年間14回の開催 (平日開催6回/土曜開催7回/出張講座1回) を行い、延べ138世帯 (379名：大人145名、子ども234名) の参加があっ

Table. 3 子どもミュージアムのプログラム内容と参加実績（平成27年度）

	開催日	曜日	内容	担当	参加世帯数	参加人数	大人	子ども	参加学生数
第1回	5月21日	木	楽器で遊ぼう	櫻井琴	15世帯	30名	15名	15名	7名
第2回	6月4日	木	絵本小劇場	高尾	11世帯	23名	11名	12名	8名
第3回	6月18日	木	おはなしのくにであそぼう	金久	11世帯	23名	11名	12名	10名
第4回	6月27日	土	体を遊ぼう	松本	12世帯	35名	12名	23名	9名
第5回	7月2日	木	わくわくあそびランド（1）	田中	20世帯	42名	20名	22名	7名
第6回	10月17日	土	お話の世界で遊ぼう	香川	11世帯	29名	11名	18名	6名
第7回	10月31日	土	プラ板でバッジなどのアクセサリを作ろう	前村	7世帯	19名	7名	12名	6名
第8回	11月12日	木	わくわくあそびランド（2）	田中	14世帯	29名	14名	15名	18名
第9回	11月26日	木	みんなで楽しく遊ぼう	櫻井京	12世帯	25名	12名	13名	8名
第10回	11月28日	土	植物の色のおしぎ	飯盛	1世帯	3名	1名	2名	2名
第11回	12月5日	土	“かず”や“かたち”であそぼう	川上	8世帯	27名	9名	18名	7名
第12回	1月16日	土	世界のおそびであそぼう	松井	7世帯	23名	8名	15名	8名
第13回	1月23日	土	親子でつくろう	三島	9世帯	29名	12名	17名	7名
出張講座	12月5日	土	紙で家をつくろう	赤星	—	42名	2名	40名	7名
				合計	138世帯	379名	145名	234名	110名

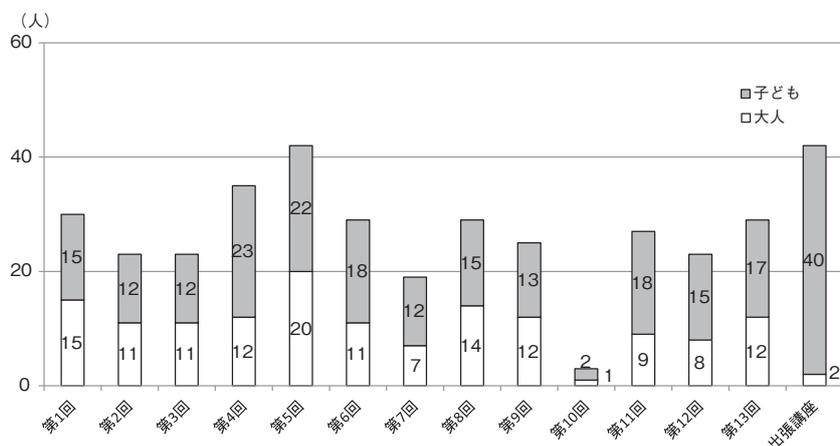


Table. 4 各回別の参加実績

た。

各回のプログラム内容及び参加実績を、Table. 3, 4に示す。

3) 参加者アンケートについて

本活動では、各回の活動終了後に参加者（保護者と小学生以上）を対象に「プログラムに参加しての所感」や「今後の活動への要望・期待」等を記述するアンケートを実施している。各対象に実施しているアンケート項目は、下記の通りである（Table. 5, 6）。

Table. 5 保護者対象アンケートの質問項目

項目1：保護者の基本情報 (性別, 年齢, 勤務状況)
項目2：参加歴
項目3：参加動機
項目4：活動内容への満足度および感想〔自由記述〕
項目5：環境・施設・設備への満足度
項目6：今後の活動への参加希望
項目7：活動への要望・期待〔自由記述〕

Table. 6 子ども対象アンケートの質問項目

項目1：お子さんの基本情報 (性別, 小学校名, 学年)
項目2：参加歴
項目3：参加動機
項目4：活動内容への満足度および感想・要望〔自由記述〕
項目5：今後の参加希望

(1) 保護者アンケートの結果

① 参加者の概要（年齢・勤務形態）

「35歳～39歳（43%）」が4割を占めており、最も多かった。次いで、「30歳～34歳（30%）」、「40歳以上（19%）」の順で多かった。保護者の中には、夫婦共に参加する家族や義母、祖父母と一緒にプログラムに参加する家族もあった。勤務形態については、「働いていない」が71%と過半数を占めており、次いで「常勤〔育休含〕（17%）」、「パート（11%）」となっていた。

② 参加歴

本活動への参加歴については、「はじめて」が37%と最も多く、次いで「4回以上（32%）」、「2回以上（18%）」となっていた（Figure. 6）。

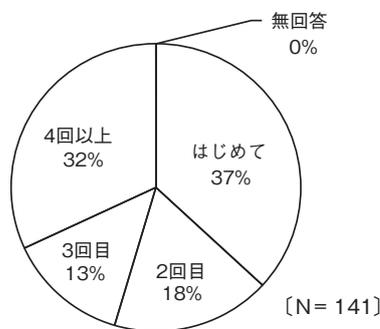


Figure. 6 参加歴

③ 活動参加の動機

参加動機として、最も多くを占めていた項目に「子どもが喜びそう」が挙げられ、145名中94名〔65%〕の回答があった。次いで、「内容に興味があった」が72名〔50%〕、「友人の誘い」21名〔14%〕という結果であった（Figure. 7）。

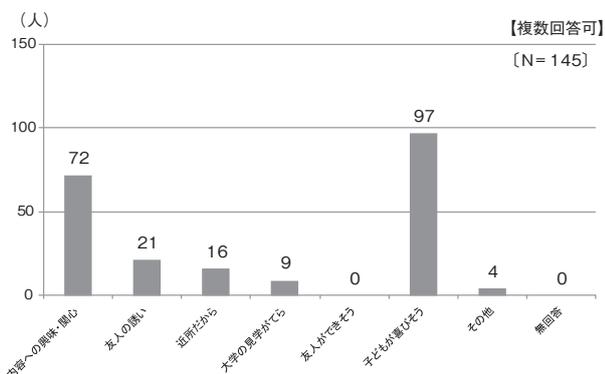


Figure. 7 参加動機

前年度と比較すると、上位2項目に関しては、昨年と同様の結果であったが、3項目に今回新たに「友人の誘い」での参加が含まれていたことを踏まえると、近年の動向として保護者同

士の誘い合わせや口コミによる参加が増加していることが窺えた。

また、活動終了後には、昼食をとりながら保護者同士が交流する様子が多々見受けられ、このような場面からも、本活動が“保護者-子ども”といった親子交流の場としての機能のみならず、保護者同士の交流や憩いの場としての機能を果たしつつあることが窺えた。

④ 活動内容の満足度

活動に参加しての満足度について、4段階評定〔非常に満足した～物足りない〕で回答を求めた。その結果、「非常に満足した」が60%であり、次いで「満足」が36%であった。このことから、活動に参加した保護者の9割以上が満足感を抱いていることが明らかになった（Figure. 8）。

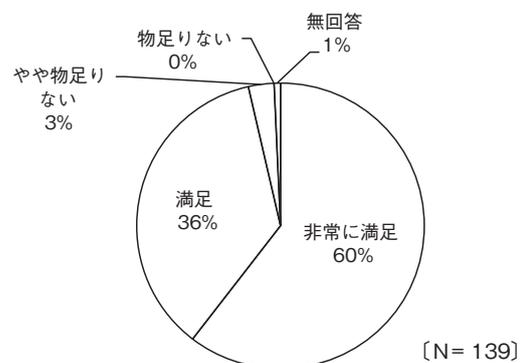


Figure. 8 活動内容への満足度

一方で、「やや物足りない」という回答も3%あり、寄せられた記述の中には、“内容が少し難しかった”や“年齢別にした方が良かった”“(司会の) 声が聞こえなかった”などの意見が挙げられていた。

このことから、対象年齢に応じた活動内容について、より慎重に検討し、当日を想定した動きや環境設定をおこなう必要があるのではないかと考える。

今後は、本活動の主たる目的である“子育て・子育て支援”という視点をより充実させていくためにも、“親-子間での関わり”以外にも、“親同士の交流の場”や“子育て世代が集える場”としての利用も視野に入れながら、活動をしていく必要があると考える。

また、保護者から寄せられた様々な所感や要望をもとに、今後の活動のあり方についてより丁寧に検討し、対“子ども”のみならず、対“保

護者〔親〕”への支援として、本活動がどのような役割・機能を果たしているのか、さらに深く検証していくことが今後の課題である。

以下、活動に参加しての保護者の声〔自由記述〕を一部抜粋して表記する（Table. 7）。

Table. 7 活動内容に対する感想〔自由記述〕

<p>【活動に参加しての感想】（一部抜粋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段、家では出来ないような遊びができて良かった。 ・音楽に合わせて楽しそうに踊る姿が見れて、ほっこりした気分になりました。 ・輪投げはできないと思っていたが、興味を持ち、楽しそうにしている姿を見て、また新しい遊びを見つける事ができた。 ・道具も様々な工夫が見られ、学生さんの熱心な取り組みを感じた。 ・子ども達の驚き等、新鮮で楽しかった。 ・体を思いっきり動かして楽しそうにしている、とても良かった。
--

⑤ 今後の活動への参加希望

今後の活動への参加希望について3段階評定〔是非参加したい～参加したくない〕で回答を求めた。最も多かったのは、「是非参加したい」で84%であり、次いで「機会があれば参加したい（16%）」となっていた（Figure. 9）。本結果より、活動に参加したほとんどの保護者が、次回以降の参加を前向きに捉えていることが窺えた。

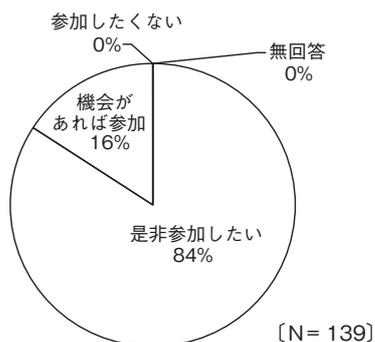


Figure. 9 今後の活動への参加希望

⑥ 企画して欲しい講座・要望

今後、企画して欲しい講座・要望〔自由記述〕としては、体を使った活動や音楽鑑賞、親子での製作活動等が挙げられた。また、少数ではあったが「託児付講座」のような、保護者を対象とした企画も、要望として挙げられていた（Table. 8）。

Table. 8 企画してほしい講座・要望〔自由記述〕

<p>【企画してほしい講座・要望】（一部抜粋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生の音楽演奏 ・ミュージカル・演劇鑑賞 ・リトミック ・全身を使った絵具遊び ・親子クッキング ・託児付講座
--

(2) 子ども対象アンケートの結果

平成27年度は、234名の参加者（保護者を除く）のうち59名が小学生以上のお子さんであった。小学生以上の参加者を対象に実施したアンケート結果を以下に示す。

① 活動参加の動機

活動参加の動機として、「おもしろそうだったから」が最も多く37名が回答していた。次いで、「うちの人が申込みをしていたから〔15名〕」、「友達の誘い〔5名〕」、「大学生に会いたかったから〔2名〕」であった。

今後は、子どもたち自身が主体的に興味・関心を抱いて参加できるように、活動内容の充実化を図り、より多くの人に参加してもらえるような広報のあり方を検討していく必要があると考える。

② 活動内容への「満足度」及び「今後の参加希望」

参加した子ども（小学生以上）の93%〔59名〕が「とても楽しかった」と回答し、次いで「まあまあ楽しかった」が4%〔3名〕、「少しつまらなかった」が1%〔1名〕であった。

本結果より、アンケートに回答した子どものうち、9割以上が“楽しかった”“面白かった”“また何かを作りたい”という所感を得ており、子どもたちにとって、有意義な時間・場として繋がっていたことが窺えた。

また、次回以降の参加希望についても、9割以上の子どもが「参加したい」と回答しており、この結果からも非常に高い満足感を得ていたことが窺えた。

4. 子育て支援活動での実践を通じた学生の学びと意識の変化について

－学生アンケートの内容分析を通して－

1) 研究の目的

本研究では、子育て支援活動『子どもミュージアム』での実践が、学生にとってどのような体験へと繋がっていたのかを検証するために、本活動に参加した学生たちが「①実践活動を通して、どのような学びや気づきを得ていたのか」、さらには「②子育て支援活動に参加する“前－後”とで、どのような意識（気持ち）の変化があったのか」その所感について内容分析をおこない、本活動での実践を通じた学びのあり方や、活動意義について考察していく。

2) 方法

(1) 調査対象

子ども学科3年生 88名

(平成27年度開講科目「子ども学演習」履修学生)

(2) 調査期間

平成27年5月～平成28年1月

(3) 調査方法および内容

各回の子どもミュージアム終了後に、学生アンケートの用紙を配布し、企画・準備段階から活動終了までを個々で振り返り、子育て支援活動に参加して感じたことや本活動に参加して得た学びや気づきについて記述を求めた（回収率62.5%）。

なお、アンケートの項目は下記の通りである（Table. 9）

(4) 分析項目

本稿では、アンケート項目の中でも自由記述で回答を求める「項目3」「項目4」の2つに着目し、“実践を通じた学生の学びや気づき”や“実践に取り組む前後における意識（気持ち）の変化”について内容分析をおこなう。

(5) 内容分析の方法

自由記述（項目3、4）で得られた内容を、KJ法³⁾に基づき分類・カテゴリー化を実施し、内容分析をおこなった（Table. 10）。

また、内容分析を実施する際は、学生の実践に対する意識の変化を継時的に把握するために“①準備・企画段階〔実践前〕 - ②活動当日〔実践中〕 - ③活動を終えて〔実践後〕”といった一連の実践プロセスを軸に分析し、そこで得られた内容（カテゴリー）を最終的に図式化した。

なお、KJ法を実施する際は、客観性をより確保する為に、本活動の運営・マネジメント全般に携わり、年間を通して本活動に関与している筆者らで分析手続きをおこなった。

Table. 9 内容分析の手順

1. ラベル（切片）づくり
自由記述で得られた文章を、1つの内容につき1枚のカードに表記し、ラベル（切片）作成をおこなう
2. グループ編成
内容的に類似しているラベルを収集する
3. 表札づくり
収集されたグループに簡潔な言葉で名前をつけていく
4. 図解化
集約されたグループの相互関係や因果関係等を検討しながらラベルを配置し、図解化していく

3) 結果

本項では、内容分析を通して得られた“学生の気づきや学び”や“実践をおこなう上で抱いた所感”について「準備・企画段階〔実践前〕」、「活動当日〔実践中〕」、「活動を終えて〔実践後〕」といった3つの実践プロセス別に結果を示していくこととする。

(1) 準備・企画段階の学生の所感〔実践前〕

学生アンケートの内容分析をおこなった結果、準備・企画段階の学生の所感として、大きく4つのカテゴリーが抽出された（Table. 11）。

まず、1つ目のカテゴリーとして〈不安・緊張〉があり、その中には“未経験の活動なので分からないことがたくさんあって不安”“全体的なイメージが湧かず不安で戸惑った”など、本活動に初めて参加するがゆえに抱く所感が集約されていた。また、“子どもたちが自分たちの企画を楽しんでくれるのだろうか”“初めて会う子どもたちと上手く関わることができるだろうか”といった、初対面の参加者への関わりに対する緊張や不安も記述に含まれていた。

次に、2つ目のカテゴリーとして〈難しさ・大変さ〉があり、“限られた時間で色々決めて準備していくことが大変”“異年齢の子どもたちが出来る内容を考えることが難しかった”など、参加する子

Table. 10 準備・企画段階の学生の所感

大項目	小項目	内 容
1 不安・緊張	1) 未経験がゆえの不安	・初めて参加する活動なので上手くいくか不安で緊張した ・未体験の活動なので分からないことがたくさんあって不安 ・初めてのことが多く緊張した
	2) 見通しがつかないことに対する不安	・イメージが湧かず大丈夫なのか不安で戸惑った ・流れや見通しが分からず不安
	3) 企画内容に対する不安	・私たちの企画を楽しんでもらえるか不安 ・子どもたちが楽しめるものを作り上げることができるか不安
	4) 参加者とのコミュニケーションへの不安	・子どもたちとどのように接したらいいのか不安 ・初めて会う子どもたちと上手く関わることができるか不安
2 難しさ・大変さ	1) 企画考案上の難しさ	・どうしたら子どもたちが楽しんでくれるかを考えることが大変 ・異年齢の子どもたちが出来る内容を考えることが難しかった
	2) 時間調整上の大変さ	・皆で集まれる時間が少なくて企画や準備をすることに苦労した ・限られた時間で色々と決めて準備していくことが大変
	3) 準備上の大変さ	・準備が間に合わずバタバタになってしまい大変 ・製作物が多く準備するのが大変
	4) アイディアや意見を統合することの難しさ	・メンバー間で意見が合わず、考えをまとめることが大変だった ・様々な意見が出るなかで統合することが難しかった
3 ネガティブなモチベーション		・最初は子どもミュージアムなんてやりたくないと思った ・(活動に参加することが) 楽しみだとは感じなかった
4 進路模索		・(子どもと関わる仕事につくか) 自身の進路に悩んでいた ・(資格取得も含めて) 今後の自分の進路に迷っていた

Table. 11 実践活動当日の学生の所感

項 目	内 容
1 リハーサルや実習での成果を発揮	・保育実習で学んだことを生かす気持ちで臨んだ ・何回も練習(リハーサル)を重ねて本番に臨んだ ・他のゼミの活動を見学し、イメージアップを図って当日の活動に臨んだ
2 臨機応変な対応	・当日の状況を見ながら臨機応変に対応した ・(時間調整の為に) 予定にはなかった紙芝居を読んで急遽対応した ・きょうだいが多い家族のサポートに入るなど、臨機応変に対応した ・想定外の子どもの動きや反応に応じて、対応を変えた
3 参加者の表情・言葉 (子どもたちの表情) (保護者からの言葉)	・子どもたちが喜んでいる表情を見て、もっと楽しんでもらおうと思い取組んだ ・活動中に子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができ嬉しかった ・保護者の方々から、たくさんの労いや感謝の言葉を頂き励まされた
4 メンバーとの協力・連携	・ゼミ全体で協力し合って取り組んだ ・メンバー同士で声を掛け合って臨んだ ・メンバーで役割分担をして、みんなで協力し合って取り組んだ

どもたちの年齢層やグループ特性を考慮した上で、企画内容を決め、且つ開催当日までに準備を進めてなければならぬことへの難しさが記述されていた。さらに、本活動はゼミ単位での取組みということもあり、企画や準備を進めていくにあたっては、ゼミ内のメンバー同士で協力・連携し合うことが求められる。そのため、“メンバー間で意見が合わず考えをまとめることが難しかった”“様々な意見が出るなかで統合することが難しかった”といった記述も見受けられ、実践をおこなう上で抱く難しさ・大変さとして集約された。

そして、3つ目のカテゴリーとして〈ネガティブなモチベーション〉があり、その中には“(活動に参

加することが) 楽しみだとは感じなかった”“最初はやりたくないと思った”といった、本活動参加に対する消極的な動機や思考が集約された。

最後に、4つ目のカテゴリーとして〈進路模索〉があり、“(活動に参加する前は) 子どもと関わる仕事につくか自身の進路に悩んでいた”“資格取得も含めて今後の自分の進路に悩んでいた”など、「子育て支援」という実践活動を目前に、保育者・教育者としての将来の進路について模索している内容が本カテゴリーに集約された。

(2) 実践活動当日の学生の所感〔実践中〕
準備・企画といった実践前の経過を経て、活動当

日〔実践中〕に、学生がどのような思いを抱きながら活動に臨んだのか、その“意気込み”や“志”さらには“実践中に抱いた所感”について内容分析をおこなった。その結果、自由記述の内容から4つのカテゴリーが抽出された (Table. 12)。

まず、1つ目に〈リハーサル及び実習成果の発揮〉があり、実践活動の本番当日を迎えるにあたって“保育実習で学んだことを生かす気持ちで臨んだ”“リハーサルを何度も重ねて本番に臨んだ”など、これまで経験してきた保育・教育実習での学びや、リハーサル〔練習〕で積み重ねてきた成果を発揮する気持ちで、実践に臨んでいたことが記述より明らかになった。

次に、2つ目のカテゴリーとして〈臨機応変な対応〉があり、“想定外の子どもの動きや反応に応じて対応を変えた”“(時間調整をする為に) 予定にはなかった紙芝居を読んで急遽対応した”など、いざ活動本番の日を迎え実践をおこなう過程の中で、想定外の状況に応じて臨機応変に対応することへの必要性を学生が抱いていたことが記述より明らかになった。

そして、3つ目のカテゴリーとして〈参加者の表情・言葉〉を受けての所感があり、“子どもの喜んでいる表情を見て、もっと楽しんでもらおうと思っ

た”“保護者から労いや感謝の言葉を頂き励まされた”など、実際に活動に参加している子どもや保護者の表情・言葉に対する学生の所感が記述に含まれていた。

最後に、4つ目のカテゴリーとして〈メンバーとの協力・連携〉があり、“メンバー同士で声を掛け合って臨んだ”“役割分担をして、みんなで協力し合って取り組んだ”など、メンバー間で協力し合って、当日の活動に臨んでいたことが記述より明らかになった。

(3) 実践活動を終えての学生の学びや所感〔実践後〕

子どもミュージアムでの実践を終え、準備段階を含めたこれまでの活動経過や自身の取り組みのあり方について、学生個々で振り返りをおこなってもらい、本活動での実践を通してどのような学びや所感を抱いていたのか記述を求めた。その記述をもとに内容分析をした結果、大きく7つのカテゴリーが抽出された (Table. 13)。

まず、1つ目のカテゴリーとして〈達成感・充実感〉があり、“素晴らしい達成感を感じた”“楽しく充実した活動となった”など、子どもミュージアムでの実践活動をやり遂げたことに対する達成感や充実感が集約されていた。

Table. 12 実践を終えての学生の学び・所感

大項目	内 容				
1 達成感・充実感	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をやり遂げて達成感あふれるものとなった ・素晴らしい達成感を感じた ・楽しく充実した活動となった 				
2 嬉しさ・楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが楽しそうにできて嬉しかった ・人と関わると色々あるが楽しかった ・参加者が楽しんでいる姿をみて自分たちも楽しく取り組めた 				
3 他者理解 (子どもへの気づき) (仲間への気づき)	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: middle;">対子ども</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもと関わる上での工夫 (声の掛け方, 興味のひきつけ方) を学べた ・異年齢の子どもたちが集まるので発達段階の違いを学べた ・子どもたちの豊かな想像力や発想力に気づけた ・子どもと関わる上で必要な気づきを学べた </td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: middle;">対仲間</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミメンバーの新たな一面の発見とともに、見方が変わった ・メンバーのことをより知ることができた ・一緒に実践活動に取り組んだことで、これまで知らなかったメンバーの一面を知ることができた </td> </tr> </table>	対子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと関わる上での工夫 (声の掛け方, 興味のひきつけ方) を学べた ・異年齢の子どもたちが集まるので発達段階の違いを学べた ・子どもたちの豊かな想像力や発想力に気づけた ・子どもと関わる上で必要な気づきを学べた 	対仲間	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミメンバーの新たな一面の発見とともに、見方が変わった ・メンバーのことをより知ることができた ・一緒に実践活動に取り組んだことで、これまで知らなかったメンバーの一面を知ることができた
対子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと関わる上での工夫 (声の掛け方, 興味のひきつけ方) を学べた ・異年齢の子どもたちが集まるので発達段階の違いを学べた ・子どもたちの豊かな想像力や発想力に気づけた ・子どもと関わる上で必要な気づきを学べた 				
対仲間	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミメンバーの新たな一面の発見とともに、見方が変わった ・メンバーのことをより知ることができた ・一緒に実践活動に取り組んだことで、これまで知らなかったメンバーの一面を知ることができた 				
4 自己理解 (自分自身への気づき)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に子どもと関わることで、やはり自分は子どもと関わる仕事をしたいということを改めて実感した ・(実習のように個々ではなくゼミ集団で取り組むので) 自分では分からない長所・改善点に気づけた 				
5 今後の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の学びをこれからの保育実習や教育実習で活かしたい ・とても貴重な体験ができ、より自分の夢を実現させたいと強く感じた ・自分が何をやりたいのか、はっきりと見えてきた 				
6 団結力	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミ内での団結力が高まり、一体感がさらに強くなった ・ゼミメンバーとの仲がより深まった 				
7 感謝の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・支えてくれた仲間や先生に対する感謝の思いが出てきた ・実践を通して学べる場があることが有り難いと感じた ・前日準備や当日の活動など、様々な所で色んな支えがあつての成功であり、感謝している 				

次に、2つ目に〈嬉しさ・楽しさ〉があり、“みんなが楽しそうにできて嬉しかった”“楽しく取り組めた”など、自分たちで企画した活動に楽しそうに参加している子どもたちの姿や表情を見て抱く嬉しさや、活動を通して学生自身が抱くポジティブな所感が集約されていた。

そして、3つ目のカテゴリーには〈他者理解〉があり、その中には“異年齢の子どもたちが集まるので、発達段階の違いを学べた”“子どもたちの豊かな想像力や発想力に気づけた”といった「対子ども」への気づきと、“これまで知らなかったメンバーの一面を知ることができた”“よりメンバーのことを知ることが出来た”といった「対仲間（ゼミメンバー）」への気づきが集約されていた。

4つ目のカテゴリーには〈自己理解〉があり、“(今回の活動を通して)やはり自分は子どもと関わる仕事をしたいということを改めて実感した”“(団体で取り組むことで)自分では分からない長所や改善点に気づけた”など、子どもとの関わりやゼミメンバーとの交流をきっかけに、自分自身への気づきや理解がさらに深まったといった記述が集約されていた。

続いて、5つ目のカテゴリーには〈今後の課題・目標〉があり、“今回の学びをこれからの保育実習や教育実習で活かしたい”“(今回の活動を通して)自分が何をやりたいのか、はっきりと見えてきた”といった内容が集約されており、実践を通して自分自身の今後の課題や将来の新たな目標獲得につながったといった内容が集約されていた。

6つ目の〈団結力〉では、“ゼミ内での団結力が

高まり、一体感がさらに強くなった”“ゼミメンバーとの仲がより深まった”など、本活動での企画・準備や当日での実践をともにしてきたことで、メンバー間の仲がより強まったといった、学生同士の関係性の変化に関する内容が集約されていた。

最後に、7つ目のカテゴリーとして〈感謝の気持ち〉があり、“様々な所で色んな支えがあつての成功であり感謝の気持ちでいっぱい”“実践を通して学べるのが有り難いと感じた”といった記述が集約されており、本活動をおこなうにあたりこれまで関わってきた周囲のサポートに対する感謝の気持ちや、実践を通して学べる環境が存在することへの有り難さなどが記述に含まれていた。

(4) 抽出カテゴリーの図式化

本項では、“①準備・企画段階〔実践前〕 - ②活動当日〔実践中〕 - ③活動を終えて〔実践後〕”といった各実践プロセス別に抽出された項目内容について、カテゴリー間の相互関係や関連性をみながら図式化をおこなった (Figure. 10)。

図式化したものを俯瞰すると、子どもミュージアムに取り組む前の学生の所感としては〈不安〉や〈緊張〉そして〈難しい〉〈大変〉といった、ネガティブな内容のものが主であったが、実践終了後には〈充実感〉や〈達成感〉さらには、〈嬉しい〉〈楽しい〉といったポジティブな所感が多く記述されていた。

実践“前-後”において、学生が抱く所感が変化した背景には、〈子どもたちの喜ぶ笑顔〉や〈保護者からの感謝の言葉〉など、実践の中で参加者と直

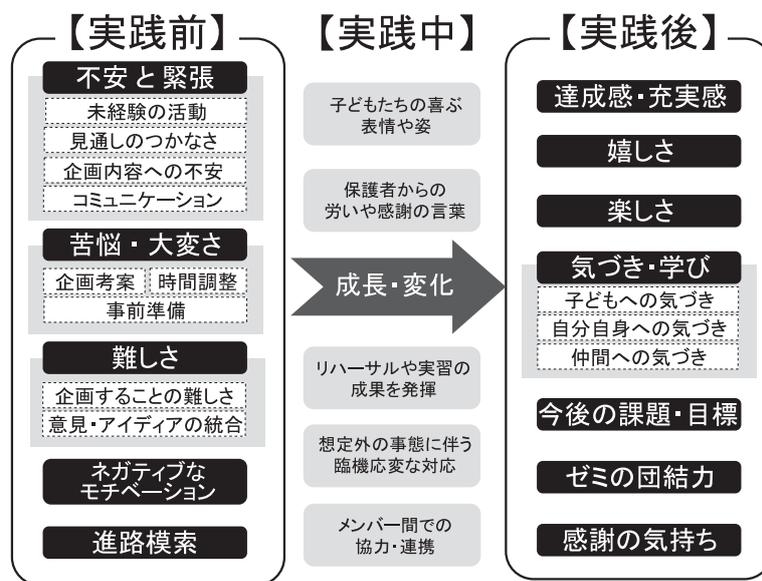


Figure. 10 子どもミュージアムでの実践活動を通じた学生の成長・変化

に関わることを通して得たものや、〈リハーサルや実習での成果を発揮することができた〉といった、これまで積み重ねてきた経験を活動の場で活かすことができたといった学生自身の所感があることが窺えた。

4) 考察

今回の結果より、実践前には多くの学生が〈緊張や不安〉を抱きながら活動に臨んでいたことが示唆されたが、活動終了後には〈充実感〉や〈達成感〉といったポジティブな所感が多く見受けられ、実践を通じた経験が学生たちにとって有意義なものとなっていたことが窺えた。

ここからは、実践過程（中でも実践前・後）における学生の意識の変化に着目し、本学における子育て支援活動『子どもミュージアム』での取り組みが、学生たちにとってどのような経験の場として繋がっていたのかについて考察していきたい。

(1) 実践前に抱く学生の不安・緊張について

今回実施した学生アンケートの記述より、本活動に取り組む以前は、ほとんどの学生が“上手くいか不安”“イメージが湧かず戸惑った”といった思いを抱いており、これから始まる実践活動への「期待感」や「楽しみ」といった、ポジティブな思いよりも、どちらかと言えば“負”の要素を含むネガティブ（消極的）な感情を抱きながら活動に臨んでいたことが窺えた。

本学で開催している子育て支援活動『子どもミュージアム』への参加は、3年次に開講している「子ども学演習」内にてゼミ単位で実施しており、原則1つのゼミが1回分の活動枠を担当することとなっている。つまり、今回参加した学生の殆どは、本活動での実践は初の試みであり、“未経験の活動で分からないことがあって不安”“初めて会う子どもたちと上手く関わることができるか不安”といった学生の記述内容からも「新規場面が故の見通しのつかなさ」や「初対面の参加者を目の前に実践をおこなうことへの戸惑い・不安」を多くの学生が抱いていたことが示唆された。

実地での実習や、実践活動をおこなう際に生じる学生の不安意識については、これまでも多くの報告がなされており^{4,5,6)}、学生が抱く不安内容に即した対応の必要性や直前指導の重要性について指摘がなされている。このことに関しては、実際に本活動に

参加した学生たちも、実践過程の中での気づきや学びとして実感していたようで記述に“他のゼミの活動時の様子を事前に見たことでイメージが湧き、落ち着いて取り組めた”“リハーサルや事前の練習で試行錯誤したことが本番での成功に繋がった”といった内容が含まれていることを踏まえると、活動当日を迎えるまでの時間を如何に過ごしていくかが、その後の実践に対する学生の意識やモチベーションにも影響していることが示唆された。

これまで経験したことがない場面での実践は、実地での経験がまだ少ない学生ならば、誰しものが少なからずの不安や緊張を抱くことであろう。このような思いを抱きながらも、本活動に参加する学生一人ひとりが前向きな気持ちで実践に臨み、且つそこでの経験が後に繋がるより充実したものになるためにも“漠然と抱く不安・緊張の背景には何があるのか”さらには“(実践前の不安や緊張を)軽減・緩和するためには今何をすべきか”，活動を共にするメンバー間で共有し合い、実践当日までの時間をどのように過ごしていくのか、一人ひとりが見通しをもって考え取り組んでいくことが大切であろう。

(2) 実践前後における意識の変化とその背後にあるもの

参加者との関わりの中で学生が感じ取ったことー先述したように実践前には、多くの学生が不安や緊張を抱いていたにも関わらず、活動終了後には“参加者が楽しんでいる姿をみて嬉しかった”“活動をやり遂げて達成感を感じた”“今回の学びを今後の実習で活かしたい”といったポジティブな所感が見受けられ、時間の経過を追う中で実践に対する意識や学生個々が抱く気持ちに変化があったことが窺えた。

このように“実践前・後”において、学生の意識や気持ちに変化が生じた背景には何があったのだろうか。そのきっかけとなる出来事や要因について今回検証を試みたところ、本活動での実践過程における様々な経験や、子どもや保護者と直に関わる中で感じ取ったことが、その後の意識の変化をもたらす“プラスの刺激”として繋がっていたことが示唆された。

その中でも、学生にとって多くの刺激となっていたものが“子どもたちの笑顔や楽しんでいる姿”や“保護者からの労いや感謝の言葉”といった、実際に活動に参加した子どもや保護者からの生の反応で

あった。初めての実践に不安や緊張を抱きながらも臨み、参加者からこのようなポジティブな反応をもたらえたことは、学生にとっては大きな成果であり、「どうしたら、子どもたち（参加者）に楽しんでもらえる活動になるだろうか」といった共通のテーマのもと、みんなで取り組んだ結果ではないだろうか。実践後の学生の所感として〈達成〉や〈充実〉、〈嬉しかった〉〈楽しかった〉といった表現が多く見られた背景には、“自分たちが考えた活動を参加者に楽しんでもらえた”という安心感や安堵感の表れであることが予測され、先述したような学生の所感や気づきは、講義を超えた実地の現場だからこそ培われる貴重な学びではないかと考える。

(3) 集団で取り組んだことによる学びや気づき

本活動は単独〔個人〕での企画・実施ではなく、“対ゼミメンバー”そして“対参加者（子ども・保護者）”，と共に創り上げていく集団活動である。本活動に参画する学生たちは、実践前にはゼミメンバーと共に企画内容の考案や活動に向けた準備に取り組む為、“メンバー間で意見や考えをまとめることが大変”“皆で集まれる時間が少なく準備に苦労した”など、如何に限られた時間内にメンバー同士で連携・協力しながら準備を進めていくのか難しさを抱いていたことが記述内容から窺えた。中には、意見が衝突し思い通りに行かない場面や葛藤を抱いた学生もいたかもしれないが、このような経験は“仲間と如何に協力して、主体的に同じ目標に向かって取り組んでいくか”ということ、身をもって学ぶことのできる貴重な場であり、このような学びは保育・教育の現場に出てからも求められる大切なスキルとなるのではないかと考える。大方（2007）もこの点については指摘しており、「集団の中で自分の出来ることを探し、集団のために行動する主体性は、今後子どもを指導・養護する教師・保育士になる学生にとって大変貴重なもの」と述べている⁷⁾。

また、“ゼミメンバーの新たな一面を発見することができ、見方が変わった”さらには“(ゼミ集団で取組んだことで)自分では分からない長所や改善点に気づけた”といった記述も見受けられ、集団で取組んだことで〈他者理解〉や〈自己理解〉が深まり、ゼミメンバーや自分自身に対する新たな気づきや発見を獲得していたことが窺えた。さらに、本活動が様々な年齢層の子どもたちを対象としたグループ活動であることも、学生の学びや成長に繋がっていた

ことが窺え、“異年齢の子どもたちが集まるので発達段階の違いを学べた”“様々な年齢の子どもたちが出来る企画を考えることが難しかった”といった所感が多く見受けられた。

このように、実践の中で“対ゼミメンバー”“対参加者（子ども・保護者）”といった色々な人との関わりを通して、学生個々の“人間的成長”や“子どもや保護者に対する新たな気づき”を獲得することができるといことは、机上の学問だけでは決して得ることのできない“実践的学び”の醍醐味であり、実践前-後の学生の所感の比較からも、本活動での実践が学生たち一人ひとりにとって、大変有意義な経験として繋がっていたのではないかと考える。

5. 今後の課題

本稿では、子どもミュージアムでの実践を通じた学生の成長・意識の変化について、学生アンケートの内容分析を通して検討を試みた。今後は、学生一人ひとりが自分自身の成長や気持ちの変化について意識化できるような工夫も必要であり、個々が“どのような目的意識〔目標〕をもってこれから活動に参加するのか”さらには“その目標をどの程度達成できたのか”、「目標設定」やその「到達度の評価」さらには、実践を終えて感じた「今後の課題」等について、可視化できるような、導入・振り返りのあり方を検討していく必要があるのではないかと考える。

注

- 1) 「小城市まちなか市民交流プラザゆめプラット小城」大学サテライト教室では、西九州大学グループが所有する教育、研究、地域連携資源を活用し、「学びの場」、「地域づくりの場」、「地域住民の健康維持の場」を提供しています。

〔詳細は大学ホームページ参照：
<http://www.nisikyu-u.ac.jp/satellite/information/categorylist/c/144/>〕。

参考文献

- 1) 大城あゆみ・西村麻希・田中麻里、『西九州大学子ども学部における子育て支援活動』、西九州大学子ども学部紀要、第6号111-121、2015

- 2) 西村麻希・田中麻里・西村侑香里, 『西九州大学子ども学部における子育て支援活動－「子どもミュージアム」平成26年度の活動報告－』, 西九州大学子ども学部紀要, 第7号85-92, 2016
- 3) 川喜田二郎, 『発想法〈続〉－KJ法の展開と応用－』, 中公新書, 1970
- 4) 長谷部比呂美, 『保育実習に関する学生の意識について－実習不安を中心として－』, 淑徳短期大学研究紀要, 第6号81-96, 2007
- 5) 入江和夫他, 『学生の保育実習不安と自立感』, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第38号21-28, 2014
- 6) 中矢明孝他, 『3年次教育実習に関する学生の意識の検討－平成25年度受講生アンケートの結果から－』, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第5号26-34, 2015
- 7) 大方美香他, 『学生の現場力を育成する, 養成校の子育て支援の在り方－こどもフェスティバルに見られた学生の意識の変化－』, 大阪総合保育大学紀要, 第2号91-108, 2007

